

んと給ふに、ひつじのくだりほどにすでにことありぬ、宮の御せうと公相の大納言皇子御誕生  
ぞやといとおざやかにのたまふをきく人々のこゝち、夜のあけたらむやうなり、ちゝおとゞま  
ことのためまふまゝに、よろこびの御涙をおちぬる、あはれなる御けしきと見たてまつる人もこ  
といみしあへず、公相公基實雄大納言三人、權大夫實藤大宮中納言公持、みな御ゆかりの殿原、う  
へのきぬにてさぶらひ給ふ、略かくて八月十日すかやかに太子にたち給ひぬ、後のふかの御事  
もおとゞ御心おちるて、すゞしくめでたうおぼす、ことわりなり、おほかたかのいみじかりし世  
のひゞきに、女御子にておはせましかば、いかにまほしくとくちをしからまし、いとさらしくし  
うて、さしいで給へりしうれしさを思ひいづれば、見たてまつるごとくに涙ぐまれて、かたじけな  
うおぼえ給ふとぞ、どしたくるまでつねはおとゞ人にもものたまひける、中比はさのみしもおは  
せざりし御家の、ちかくはこのほかに世にもおもく、やむことなうものし給ひつるに、この后  
の宮まゐりたまふ、春宮むされさせ給ひなせして、いよくさかえまさりたまふ、行すゑおしは  
かられていとめでたし、父の入道とのさへ御いのちながくて、かゝる御すゑども見給ふもさこ  
そは御心ゆくらめとおしはかるもまゑる、

〔太平記〕立后事

文保二年八月三日、後西園寺太政大臣實兼公ノ御女、子后妃ノ位ニ備テ、弘徽殿ニ入セ給フ、此  
家ニ女御ヲ立ラレタル事已ニ五代、是モ承久以後、相摸守北代々西園寺ノ家ヲ尊崇セシカバ、  
一家ノ繁昌、恰天下ノ耳目ヲ驚セリ、君後關東ノ聞エ可然ト思食テ、取分立后ノ御沙汰モ有  
ケルニヤ、

〔教興卿記〕應永二十年三月十六日、裏松殿圓寂、子天下觸穢也、

〔續本朝通鑑六十一〕應永二十年三月乙未、大納言從一位藤重光逝、以外戚之親爲院執權、且依武